



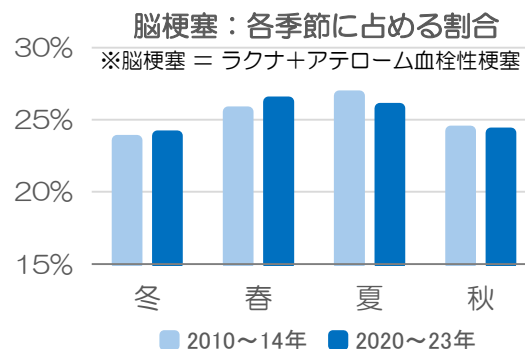
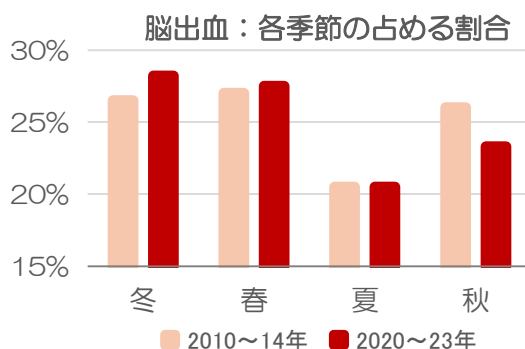
すこやか

「信頼と共創」— 永続的で誰一人取り残すことのない医療を目指して —

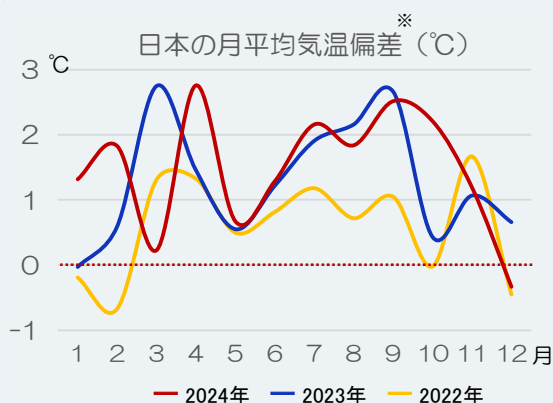
健康 あとばいす

脳卒中は夏に多い？ 冬に多い？

脳卒中は寒い冬に多いと昔から言われていますが、暑い夏にも脱水症などが原因となって脳梗塞が増えるという意見があります。本当はどうなのでしょう。日本脳卒中データバンクの報告から調べてみました。高血圧症との関連が強い脳出血は、冬に多く夏に少なくなります。一方、血栓などで脳血管がつまる脳梗塞は、春から夏に多くなります。10年前と比べると春に増加しています。



(冬：12-2月、春：3-5月、夏：6-8月、秋：9-11月)



気象庁のデータから最近の気温変動を見てみると、夏だけではなく3月や4月の気温上昇が顕著です。急な気温上昇に対する暑熱順化の遅れなどが、春の脳梗塞増加と関連しているのかも知れません。

梅雨明けとともに気温が急上昇しています。
暑熱順化を意識した暑さ対策が大切です。



脳卒中の超急性期治療を担う 一次脳卒中センター (PSC) コア施設

当院は、脳梗塞急性期に対する治療実績や診療体制をもとに、24時間365日機械的血栓回収療法が対応な施設として日本脳卒中学会が認定する「一次脳卒中センターコア施設」です。文字通り、地域における脳卒中治療のコアとなる施設であり、千葉県内に20施設、千葉市内では当院を含めて3施設が認定されています。



脳疾患・脳卒中をテーマに「救急隊研修会」を開催しました

2026年7月24日(金)午後、当院の会議室において「救急隊研修会」を開催しました。

3回目となる今回の研修会は、脳疾患・脳卒中に関する話を聞きたいという救急隊員からの要望に
応えて、「脳卒中患者の観察のポイントー当院への搬送例を参考にー」というテーマで、脳神経
外科 主任医長 折口模一医師が講演しました。

日本の脳卒中の現況の話に続いて、1分1秒を争う脳卒中
診療の現場では、脳卒中を疑う症状を捉え、治療方針決定
に必要な情報を速やかに収集し、脳卒中治療が可能な医療
機関に出来るだけ速く搬送することの重要性が救急隊員に
伝えられました。後半は、実際に救急隊員が脳卒中と判断
し当院で搬送された患者さんについて検討し、診断のポイ
ントや治療についての解説が行われました。



当日は38名の救急隊員の方に参加いただき、多くの質問や意見、当院への要望などを伺うことが
できました。講演後の救急隊員へのアンケートでは、実際の搬送症例についてのフィードバックとな
るような研修会の要望が多く見られましたので、これらの意見を参考に次回の研修会を開催してい
きたいと考えています。
(地域医療連携室)

「Time is Brain」と「Act Fast」



「Time is Brain」

年をとるごとに脳細胞は減少していきます。脳への血流が途絶えると1分間で
約190万個の脳細胞が死滅し、これは約3週間の加齢に匹敵するそうです。
脳卒中治療の基本は、出来るだけ早く脳の血流を回復させて脳細胞を救うこと
です。1分でも1秒でも、早ければ早いほど、より多くの脳細胞を救うことが
できます。

アクト ファスト ACT FAST !!

FASTは、Face、Arm、Speech、Time の頭文字。1つでもこのような症状が突然出
てきたら、脳卒中の疑いがあります。

顔 (Face)



片側が下がって動
かない

腕 (Arm)



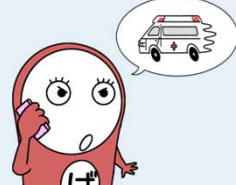
片側の腕に力が入
らない

言葉 (Speech)



呂律が回らない
言葉が出ない
言葉が理解できない

すぐに (Time)



すぐに救急車を呼んで
ください

脳卒中治療は1分1秒を争います。初期症状を見逃さず、迅速に対応することが重要です。
そのために、**ACT FAST** を覚えましょう。



医療法人社団 明康会

かない内科

広報誌「すこやか」連携登録医紹介

～「あなたらしい」をかなえる。地域とともに、これからも。～



1997年4月に千葉市緑区おゆみ野で開設したかない内科は、現在、認知症・脳神経内科を専門とする金井哲也院長を中心に、総合診療を軸とした地域密着型医療を提供しています。2025年5月には沖縄県に初の分院「いろのわクリニック」を開設し、千葉と沖縄で地域共創型の医療を展開しています。



266-0031

千葉県千葉市緑区おゆみ野3-22-6

JR外房線「鎌取駅」南口より 徒歩3分
お車でのお越しの場合は、患者様用駐車場として
3か所の駐車場をご用意しております。

かない内科
HPこちらより



院長
金井 哲也 先生

副院長
井上 学 先生

特色1

充実した診療体制と在宅医療

一般内科に加え、認知症、パーキンソン病、脳卒中後遺症、膠原病、生活習慣病、がん診療、救急医療まで幅広く対応し、「あなたらしいをかなえよう」の理念のもと、患者さんの生活や家族、地域とのつながりを大切にした診療を実践しています。訪問診療・訪問リハビリに加え、2026年3月から訪問看護を開始し、認知症専門看護師による在宅療養支援や終末期医療にも力を入れています。また、CT、内視鏡、超音波、各種迅速検査など検査体制を充実させ、外来・オンライン・訪問診療を組み合わせ、住み慣れた地域でその人らしく暮らし続けられる、切れ目のない医療を提供しています。

特色2

地域共創と社会的処方への取り組み

「医療の枠を超えて人生と幸せをデザインする」をミッションに掲げ、地域交流イベント「3rdプレイス」、社会的処方※、市民公開講座やワークショップ等を通じて、病気や障害、年齢、背景などの“いろ”を超えて、人と人が支え合える温かな“わ”が自然につながる”ごちゃまぜ”な地域づくりを進めています。

※社会的処方：

薬や医療だけでは解決できない「孤独」「生活困窮」「社会的孤立」「運動不足」「生きがいの喪失」などの社会的要因に対して、地域の資源や活動につなげることで健康やQOLの向上を目指す取り組みです。

医療連携

千葉メディカルセンターとの密接な地域医療連携

千葉メディカルセンターには地域の急性期基幹病院として絶大な信頼を寄せていて、数多くの患者さんをご紹介させていただいています。地域の急性期医療を担う千葉メディカルセンターとの連携では、治療後の患者さんが安心して地域へ戻れるよう、在宅医療や訪問看護を含めた受け入れ体制を強化しています。急性期病院と地域クリニックがそれぞれの役割を担いながら緊密に連携することで、「病院完結型医療」から「地域完結型医療」への転換を進めていきます。また、情報共有や退院支援、多職種連携を充実させることで、地域住民の方々が住み慣れた場所で安心して暮らし続けられる医療体制の構築を共に考えていきたいと思っています。

これからも、“顔の見える”地域医療連携をさらに深め、一人ひとりに寄り添う医療を実践してまいります。



日米の看護学生による健診センター視察

【学術交流】米シンシナティ大学・千葉大学の皆さまが当院を訪問されました

(健診センター)

本交流は、当院健診センターにおける看護師の役割や健診事業の概要・運営体制への理解を深めていただくことを目的に実施されました。当日は、海外生活経験のある当院院長が英語で挨拶と病院紹介を行ったほか、施設見学やディスカッションを実施。日米の予防医療や検診制度の違いについて、活発な意見交換が行われました。



アメリカの学生が特に驚いていたのは、安価に健診（米国ではヘルスチェックアップ）を受けられることでした。日本では年に1回の健診が義務付けられており、会社や自治体といった組織が費用を負担してくれます。一方、個人主義のアメリカでは、健康管理も個人にお任せのため、費用も日本の10倍近くになるそうで、日本の健診制度が羨ましいとのことでした。恵まれた環境にいる日本の皆さまは是非、健診を受け、ご自身の健康管理にお役立てください。当院は今後もこうした国際的な知見を取り入れ、地域の皆さまにより質の高い医療・看護を提供してまいります。

事務系女性職員のオフィススタイル開始

当院では2026年7月より、多様性推進の一環として事務系女性職員の制服を廃止とし、オフィススタイルに変更いたしました。すでに企業や行政などもジェンダーレスの観点より、女性の制服廃止の動きが広がっており、職員の個性を尊重し、意欲的に生き活きと仕事ができる環境を整えること、制服による画一的なイメージを払拭し、自立した職員像を目指すことなどの意識改革もねらいとしています。

患者さまより当院の職員と判別できるよう、職員は《青色の病院ストラップ》と名札を着用していますので、お困りの際はお気軽にお声がけください。マナーを守り、これからも、ご来院された皆さまへのより良いサービス向上を心掛けてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。



編集後記

早いもので2026年も折り返しとなりました。

厳しい暑さが続く今日この頃、皆さまいかがお過ごしでしょうか。今号では、夏の脳梗塞や救急隊との連携、地域に根差したかない内科様の温かい診療をご紹介いたしました。また、海外との学術交流や新しい装いなど、当院の新しい変化もお伝えしています。「Time is Brain」の教訓どおり、いざという時の早めの行動と日常の健康管理を心がけ、この夏を健やかにお過ごしください。

「すこやか」vol. 52 2026年8月10日発行

医療法人社団 誠馨会 千葉メディカルセンター

〒260-0842 千葉市中央区南町一丁目7番1号

TEL 043(261)5111(代表)

URL <http://www.seikeikai-cmc.jp>

編集・発行責任 千葉メディカルセンター広報委員会